聖　書：コリント人への手紙第一７：1〜9
説教題：結婚と独身
日　時：2022 年 5 月 29 日（朝拝）

今日の 7 章からコリント人への手紙第一は新しい区分に入ります。これまでは教会における分派の問題、また性的不道徳の問題について語られましたが、1 章 12 節に「あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました」と記されていましたように、パウロが人々から聞いた情報がもとになってメッセージが語られて来ました。しかし今日の 7 章 1 節は「さて、『〇〇〜』と、あなたがたが書いてきたことについてですが」と始まります。つまりこれはコリント教会がパウロに書き送った手紙に対する応答の言葉であるということです。同じ調子で 8 章 1 節は「次に、偶像に献げる肉についてですが」と始まり、また 12 章 1 節は「さて兄弟たち、御霊の賜物については」と始まります。このようにこれ以降しばらくはコリント人から届いた手紙に対し、7 章から結婚について、8 章から偶像礼拝について、そして 12 から御霊の賜物について、パウロが回答している部分であるということになります。

さて、その出だしとなる 7 章 1 節は第 3 版までの訳とは大きく異なっています。新改訳 2017 では「男が女に触れないのは良いことだ」という部分が括弧でくくられ、コリント教会からの手紙にあった言葉を引用する形になっていますが、第 3 版の 7 章 1 節はこうなっています。「さて、あなたがたの手紙に書いてあったことについてですが、男が女に触れないのは良いことです。」　こちらの場合、男が女に触れないのは良いと言っているのはパウロであることになります。「男が女に触れる」という表現は性的な交わりを指す婉曲的表現と考えられますので、するとパウロはここで性的な関係は持たない方が良いと言っていることになります。そして後にパウロは自分が独身であると述べますので、この 7 章の基本論調は独身が望ましいというものであるように読めます。ただしそれができない人のために結婚は許されている。それはいわば譲歩であると。ところが新改訳 2017 の訳では印象がガラッと変わります。「男が女に触れないのは良いことだ」と言っているのはコリント人であって、それに対してパウロはそうではないと訂正していることになります。むしろ結婚関係における性的な交わりは奨励されています。結論から言えば、全体の流れを考慮すると 2017 の訳の方が正しいと思いますし、今日訳される聖書のほとんどはこちらの解釈を取っています。今日の説教も、この 2017 の訳に沿って見て行きます。

なぜコリント人たちは「男が女に触れないのは良い」と考えたのでしょうか。これまで見て来た通り、コリント人たちは自分たちは知識や知恵を持つ優れた霊的な信仰者であると自負していました。その彼らは救いの霊的側面に多くの関心を注ぐあまり、からだに関することを軽んじる傾向がありました。その結果、肉体はどうせこの世限りで、やがて捨て去るだけだからと考えて、ある人たちは不道徳な行いを許容していました。この考えと根本的につながっていますが、他のあるコリント人たちは肉体を軽視し、肉体に関わる事柄を断つことによって、より霊的な人間になると考えたようです。今や霊的に成熟した信仰者となった自分たちは、からだに属することから離れることによって、さらに霊的な高みに上ることができるのではないか。だから男は女に触れない方が良いのではないか。そう考えていた。その彼らの主張に対してパウロは「そうではない」と言っているわけです。2 節 :「淫らな行いを避けるため、男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさい。」

さてある人はここを読んで、ここに述べられる結婚観はあまりに低級なものではないかと考えます。結婚は淫らな行いを避けるためのものなのか。性的欲求を満たすためのものなのかと。しかし先に申し上げますと、パウロはここで結婚に関する全体的な話をしようとしているわけではありません。彼がしているのはコリント人たちの問いに答えることです。6 章で見た通り、コリントの町や教会には性的不道徳の問題がありました。また彼らの手紙に記されていたように、逆に性的交わりは断つべきではないかという考えを持つ人たちもいました。このように「性」に対する誤った見方がコリントには充満していたので、パウロは結婚における性の問題に焦点を当ててここを書いているだけです。キリスト教は結婚をどう考えるかという全体的な教えを受けようとするなら、エペソ人への手紙 5 章など他の聖書箇所があります。ですから私たちはここで触れられていない事柄に注意を向けて、あれが述べられていない、これも述べられていないと文句を言うのではなく、パウロがここで焦点を当てて語っていることに注意して聞き、そこから結婚に関する大事なことを学ぶようにすべきです。

さて、この 7 章冒頭は結婚していない人に向かって「淫らな行いを避けるため結婚しなさい」と勧めているのではなさそうです。もしそれが目的なら、パウロは結婚しなさいと言えば終わりでした。ところが続く 3〜5 節を読むと、すでに結婚関係にある人たちが問題にされていることが分かります。つまりすでに結婚している人たちの

間に性的関係を低いことと見る人たちがいた。その彼らの中に、男は女に触れない方が良い、その方が霊的であると考える人たちがいたということです。その人々に対してパウロは「義務を果たしなさい」と語っています。3 節 :「夫は自分の妻に対して義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。」

一読して分かる特徴は相互性です。夫か妻のどちらかにだけ義務があるのではありません。お互いがお互いに対して義務を果たすようにと言われています。そして大事なことは、4 節にある通り、自分のからだについての権利を自分は持っていない、それは相手のものであると認識することです。それは言い換えれば、5 節にある通り、「互いに相手を拒んではならない」ということでもあります。つまりコリント教会の夫婦の中には相手を拒む人たちがいたのです。1 節に記された考えに基づいて、片方が相手を拒む。するとどうなるでしょう。それはその夫婦にとって危機的な状況となります。拒まれた方は淫らな行いへと至る可能性があります。サタンの誘惑に屈して、6 章で見た通り、遊女のもとへ走って行くということが起こりかねない。結婚は二人は一体となるものです。二人は「お互いが一つとなる」という契約に入りました。ですから自分のからだは相手のものです。拒否する権利は自分にはありません。このことを良く考えなければならないということです。

ただしここを間違って捉えないように注意すべきであると思います。ある人はここを読んで、相手のからだは私のもの。だから私の好きなようにできる。相手は拒めない。聖書はそう言っていると読もうとするかもしれません。しかしパウロはそうは言っていません。相手のからだは自分のものとは言っていません。言い方はその反対です。自分のからだは相手のものであると。つまりこれは相手に何かを要求するための言葉ではなく、自分は自分のからだをそのように相手に与えるべきであるということを言っているものです。これは大きな違いです。つまり大事なことは相手のことを思うということであり、また相手への愛によって自分自身をからだを含めてささげるということです。決して相手から奪うとか、相手に要求するという思想ではありません。大事なことは自分勝手な思いで相手を拒まないということです。相手に与えること、自分のからだは自分のものではなく相手のものであること。そのように互いを思いやり、互いを愛する関係の中で神が備えてくださった結婚生活の祝福に生きるべきであるということです。

しかしそこには例外もあるというのが5節の「ただし」以下の文章です。祈りに専心するために離れているということはあり得ると。これは別居の意味ではなく、性的関係を控えるという意味です。もしかするとある事柄のために集中して祈る必要が出てくるかもしれません。大きな課題について、家族について、子どもたちのことについて、今後のことについて、あるいは教会や他の誰かのとりなしのため・・・。そのことに優先して心とからだをささげるためです。しかしそこには条件があります。一つは「合意の上で」です。一方が勝手に宣言して、相手にこれを強いてはいけない。両者の合意が必要です。二つ目は「しばらく」の間だけ。これは短い期間を指します。そして三つ目は「再び一緒になる」ということ。この控える期間が長期に渡れば、5節後半にある通り、サタンの誘惑に身をさらすことになります。その結果、片方が不道徳へ、姦淫へと連れて行かれるかもしれません。ですからこれらの条件は守られるべきです。

そしてパウロは6節で、これは「譲歩として言っているのであって、命令ではありません」と言います。例外的にしばらく離れることはあり得ると言ったが、これは命令ではないということです。逆から言えばそうしなくても良い。二人があることのために熱心に祈りつつ、性的交わりを保ち続ける道はあるかもしれません。ですからこれは命令ではない。基本は性的義務を果たすということです。

さて7節に来ると、パウロは突然、自分の願いはすべての人が私のように独身であることだと言います。8節でも「私のようにしていられるなら、それが良い」と言います。ここからパウロは独身の方がより優れた状態であると言っているのではないかと読む誤解が生じやすいのでしょう。それにしてもなぜパウロは、ここで突然自分の独身について触れたのでしょう。それはおそらく1節の「男が女に触れないのは良いことだ」というコリント人たちのスローガンの背後に、「パウロは独身である」「彼は女に触れていない」という考えがあったからでしょう。考えてみればイエス様もそうでした。ですからやはり霊的な人は、そこから脱却すべきではないか、そういうことに関わり合うべきではないのではないかという問いが生まれたのであろうことは理解できます。そんな彼らに対してパウロは、結婚している者の義務について語って来ましたが、「ではパウロ、あなたについてはどうなのか」という無言の問いに答える必要があったのでしょう。そこでパウロは自分の立場として、「自分は独身であり、自分はこのあり方が良いと考えている。私としてはすべての人が私のようであることを願

うほどである」と言っているわけです。しかし彼は決して、そちらの方が勝っているとは言っていません。7 節後半で「しかし、一人ひとり神から与えられた自分の賜物があるので、人それぞれの生き方があります。」と言っています。大切な点は、それは人が選ぶものではないということです。それは神の賜物によるということです。イエス様もマタイの福音書 19 章 11～12 節でこう言われました。「しかし、イエスは言われた。『そのことばは、だれもが受け入れられるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができるのです。母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にさせられた人たちもいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい。』」　パウロは神の召しに従って独身の道を歩んでいました。そしてそれを良いことだと言っています。しかし人にはそれぞれの生き方があります。

ですから彼は 8 節で、結婚してない人とやもめに言います。「私のようにしていられるなら、それが良いのです」と。そのように召されている人にとって、それは良いことです。しかし 9 節で「自制することができないなら、結婚しなさい。欲情に燃えるより、結婚するほうがよいからです。」と言います。ここから独身の賜物の一つの現れとして、独身でいるために欲情が燃えて自分をコントロールできない人ではないということがあげられます。この点で自分をコントロールできる賜物を与えられているということです。パウロはこちらの方が勝っている人だとは言っていません。それは神の賜物によります。また後の 7 章 33～34 節にこういう言葉もあります。「しかし、結婚した男は、どうすれば妻に喜ばれるかと世のことに心を配り、心が分かれるのです。独身の女や未婚の女は、身も心も聖なるものになろうとして、主のことに心を配りますが、結婚した女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世のことに心を配ります。」ここから福音のために集中して自らをささげることのできる賜物を持っている人であるということもあげられます。しかし 9 節でパウロは、自制することの難しい人は結婚しなさいと言います。それは悪いということではありません。それはそういう召しがその人にあるということです。その人はその神の御心に従うのが良い。欲情に燃えて自分をコントロールできないより、むしろ結婚して自らをふさわしく神の前にコントローする歩み、自制する歩みに進む方が良いと言っています。

今日見るのはここまでです。以上から思わされるのは、霊的であることを求めるあまり、肉体に関することを低く見たり、軽蔑してはならないということです。言い換

えれば「性」は良いものとして神から与えられているということです。それは結婚関係の中でこそ用いられ、喜び楽しむように与えられた神からの良い贈り物であるということです。

私たちはこのからだについて、性について、誤った理解、偏った理解をもって相手を拒み、サタンの誘惑にさらすことがないように、互いに自分自身を愛の内に相手に与える交わりの内に神が備えてくださった結婚の祝福を益々味わい知り、神をほめたたえる生活へ進む者とされたいと思います。また一方で独身の道があることも述べられました。結婚がすべてではありません。そういう神の召しがあります。パウロはそれを自分として良いと言いましたし、そう導かれている人にとって、それは良いことだと言いました。神は私たちをキリストにある救いへと導いてくださり、それぞれが自分に与えられた召しに従って喜んで生きる生き方を備えてくださっています。私たちは神の召命と導きに感謝して、このみことばの光の下でもう一度自分のあり方を考え、神の御心に沿って生きる者へ導かれたいと思います。賜物を与え、そのように歩ませてくださる神の力と導きを味わって、どちらの道を行くにせよ、そう導かれている者にとってそれは良いことだと感謝して、心だけではなくこのからだをもって、神の栄光を現す歩みへと進む者へ導かれたいと思います。